

丸山晚霞記念館だより 第3号

当館に関連する情報を、お知らせします。
今後、およそ年2回程度の発行ペースで、
内容はホームページにも掲載します。

2016年9月24日発行

- ・ 山岳画家としての丸山晚霞
- ・ 寺院に残る丸山晚霞作品
- ・ 丸山晚霞のアトリエ羽衣荘

山岳画家としての丸山晚霞

丸山晚霞の幼少期

丸山晚霞は水彩画家として活躍したが、その題材の多くは山岳風景、田園風景である。日本洋画における山岳画のパイオニアであるといっても過言はないが、この事実はあまり知られていない。今回は山岳画家としてのルーツを述べたいと思う。

丸山晚霞は、1867年（慶応3）に現在の東御市祢津に生まれた。祢津は背後に浅間連山がそびえ、西に北アルプス、南には蓼科山、八ヶ岳などが一望できる田園地帯である。朝夕はもとより、四季おりおりにその表情を変える山々と祢津村の自然が丸山晚霞の感性に与えた影響は大きかった。

—幼少の頃、山の草花の匂うある夏、母に連れられて鹿沢温泉に行った。私の郷里より北方地蔵嶺を越えた上州の深沢にあって、距離は三里。このとき馬上に揺られて駒返りという坂道を登ると、山は深い暑い、林の中に蝉が鳴いていた。ようやく地蔵嶺の頂に達した。見慣れない湯の丸、鞍骨、棧敷の高峰が目の前に迫って、冷やかな風が吹いてくる。純白の霧は深い谷から湧きあがる。物寂しいような小鳥が草原の中に啼いていた。この時の感じは小さい心にも、神秘的な人間のものでないような境地と思った。

（「地蔵嶺の頂」丸山晚霞、『少年世界』22巻9号、大正5年）

日本アルプス写生旅行

10代から20代にかけて、家業であった蚕種業の手伝いで、地蔵峠を越えて群馬県へ繋ぐ通ったことは、丸山晚霞を健脚にしなければならず、運命の出会いをもたらした。

1895年（明治28）、沼田付近の利根川べりで写生をしていた吉田博に出会った。吉田の描く絵は、それまで見たことのない水彩画で、丸山晚霞は落雷に打たれたごとき衝撃を受けたのである。

この吉田博が1898年（明治31）6月、突然祢津村の丸山晚霞宅を訪ねてきた。福岡県久留米市出身の吉田博にとって、夏にかかわらず白銀をいただく北アルプスは、憧れであったにちがいない。

日本人にとって、山は長い間狩猟や信仰の対象で、現在のようになスポーツやレジャーとしての近代登山は1888年（明治21）ウォルター・ウェストンの来日が幕開けといわれているから、北アルプス（当時は日本アルプスと呼んだ）は当時秘境といっても過言ではない所で、吉田が「写生にでかけよう」と誘ったのは、信州の山男なら同伴者として心強いという期待があったのではないだろうか。

こうして丸山晚霞は盟友吉田博と連れだって、おそらく日本初であろう、写生を目的とした約2ヶ月にわたる「日本アルプス写生旅行」を敢行した。もっとも丸山晚霞自身もこの地を歩くのは初めてのことであり、「西に向かえばよい」といった気楽さであった。

蒸し暑い6月、イーゼルと画材、登山用具などを背負い、真綿入りの冬支度という異様ないでたちは、道中好奇の目で見られた。

この日本アルプス写生旅行は、約2ヶ月に及び、経路の概略は次の通りである。

祢津—大屋—長瀬—鹿教湯—三才山峠—浅間温泉—松本—島立—波田—島々—大野川—白骨温泉—平湯峠—平湯—栃尾—船津—茂住—飛騨古川—飛騨高山—寺坂峠—野麦峠—奈川—島々—波田—松本—保福寺峠—上田—祢津

以下はおそらく島々を過ぎ、いよいよ梓川沿いに溪谷を遡上した際の丸山晚霞の気持ちを表した文章である。

—吾は稚児の頃より、朝に夕に遥かの天涯にこの連峰を望み、一度はこの連峰のあたりを跋涉せんとの宿望は、今果たし得たのである。近づきて之を仰望すれば、山岳は皆奇怪なる巖石より成り、その巖石の高聳するもの、流れしもの、千態万状を極めて構造されたる岳は、峯頂鋸葉状をなして続けるもの、または俊秀孤立したるもの、連続して西北に走り、山の凹めるところは一帶の白雪、沢となり溪谷となりて、嶺より麓に流れ下れるものは、雪もその形状に残りて、日に燦爛と輝き、華麗といわんか荘厳といわんか、吾はこれを讚する語を知らず、ただ崇高の感を充たして写生したのである。

（「飛騨の旅・上」丸山晚霞、『みづゑ』14、明治39年7月）

登山道もろくに整備されておらず、またガイドブックなどあるはずのない深山に、冒険のごとく踏み込んだ二人の青年にとって、その光景は神の住む仙境のごとく映ったのである。

—（前略）自分等は人間の境を脱して神になった様な考ひに充たされた、而して人間が賞め讃える名勝負いふものは、全く凡景俗景である。人境を去ったこの間の風物は、たしかに山霊が吾等に画題を恵與してくれたのと信じ、都にありて、隅田川や綾瀬又は三河島等の風景を描て、満足して居る画家

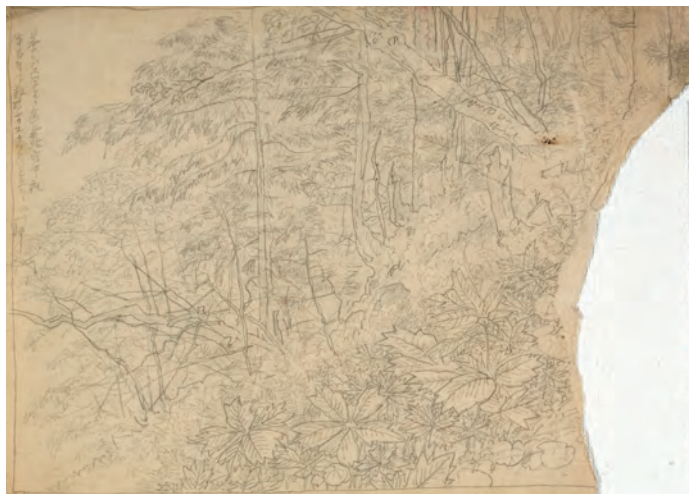
1 吉田博「田中」水彩（所在不明）
左手前の看板には「せうとめや」とある。



丸山晚霞記念館だより

を気の毒の様に思ひ、又かかる画家を凡画家として、語るに足らぬ等友と語った（中略）今考へて見ると、人間として為す事の出来ぬ事を平気で為して居った、この当時の旅装の怪しいのは、人間として恥ずかしくて出来るものでない、写生を為す日^{おお}掩ひを要せず、雨が降るとも雪が降るとも傘を要せず、衣類を纏ふて居るのが、寧ろ不思議位で、人に接するに人らしき言語を交へず、人を人として見ず、露宿どころか雨の降る夜、山中で立ちあかし、一日位の絶食は平気のもので、仙食と称して木の実や草の芽を食した事もある、揃いも揃ふた吾等二人は、人々よりも人間らしくないといはれて居った。されど人間は人間であるから、恥も知り、空腹になれば矢張り苦しいのである。（中略）写生に人間を忘れ、終に日が暮れたのである。日が暮れて空腹を覚え、今宵の宿といふ考ひが出たのであるが、この境よりは何れに出づるも三四里を行かねば、人家には出ないのである。平気で露宿を為す訳にもゆかぬから、勇気を起こして夜半、大野川といふ山村に辿りつき、宿舎をたゞいて無理に宿を請ふたのである（後略）。

（「飛驒の旅・上」丸山晚霞、『みずゑ』14、明治39年7月）



2. 日本アルプス写生旅行のうち、《露宿せし夜》1898年
左端には、山中で野宿した際に、雨によって欠損してしまった絵のうちの一つであることが記されている。

この旅では、軽装であったことに加え、もとより気楽に考えていたことが、このような、後になれば笑い話のような事態を招いたことも少なくなかった。それでも若い二人は意気揚々と旅を続け、飛驒の船津にたどり着いた。そこで珍事が起こったのである。

山中を獣の如く歩き回ったため、日焼けと不潔な身なりとなった「仙骨」2名が、船津街中の一番の旅館に投宿した。久々のご馳走にありつき、疲れもあって早々に床につかんとしたその時、突然にふすまが開けられた。そこには警官が立っていたのである。

吉田が「我等は疲労しており、用事があれば明日にしてくれ」と言うと、「急用あればこそ夜更けに来たのだ、起きろ！」と横柄な態度で迫った。

二人の身なりから、怪しいと思った宿の女中が通報したということだが、吉田は「疲労した人民を保護するのは、警官の職務であろう。我等を怪しく思い、無銭投宿すると思うのであれば、出入口に見張りをつける。もっとも我等は『仙骨』である」と吉田が返した。これには警官も立腹し、職務質問が始まった。

二人が描いた絵を見て「これはどこだ？」という警官に、「平湯」と答えると、警官は「平湯ではない」という。

ここで血氣溢れる「仙骨」は、「平湯ではない」というのは近頃奇怪千万である。もっとも我等に嫌疑をかけ、安眠を妨害するような『凡眼』には、詩人や画家の境地など分かるわけではない。日々物質的名誉利達のほかに何もせず、これが平湯と理解しないのは、汝の凡俗を露見しているも同然である」と返したのである。「然り、然り」と丸山晚霞も相づちを打つ。

さすがの警官もこの弁舌に圧倒され、この夜は引き上げたということであった。



3. 船津で警官が尋問に来た時を滑稽に描いた作品

さて、旅も終盤となり懐具合もさみしくなったころ、二人は帰路の途中で松本の望月氏宅へ立ち寄った。あまりの奇怪な風体に、近所の子どもたちがぞろぞろと後をついてきたというが、出迎えた望月氏の妻も、その姿に驚愕したという。その上、あいにく望月氏は不在であった。

それでも、まずは風呂だということで、銭湯にでかけたが所持金が足りない。吉田は、大枚しか持ち合わせがないとして、小銭を（望月氏から）借りたらよいと提案し、これを丸山晚霞も妙案として採用。久しぶりの湯につかって生まれ変わった気分で望月宅へ戻った。

望月氏は帰宅しており、もてなしてくれた上に、清潔な衣類も貸してくれた。そしてここからは上田までの馬車で帰るのがよいと勧めた。大枚しか持ち合わせないという「大嘘」がここでばれそうなのである。とりあえず「ではそうしよう」ということで停車場へ向かうそぶりで、望月氏宅から見送られた二人は、望月氏が見えなくなるや、山道へときびすを返し、保福寺峠を越えて上田を経由して柵津に戻ったのである。

この冒険珍道中は、丸山晚霞にとって吉田博の卓越した画才に触れるよい機会であったと同時に、吉田博が山岳画家として生涯を貫いたその機会でもあった。『みずゑ』に寄稿した丸山晚霞の「飛驒の旅 上・下」は、かなりの長文であるがユーモアにあふれ読者を飽きさせない。

この翌年、吉田は渡米し大成功を収める。丸山晚霞もその後を追って1900年（明治33）に渡米し、同様に大成功を収めるのである。

高山植物との出会い

さて、丸山晚霞といえば高山植物である。初期の作品にも、高山植物を配した構図が散見されるが、丸山晚霞が高山植物の美しさに開眼したのは、白馬大雪渓を訪れて以降とあってよいだろう。

丸山晚霞が白馬へ出かけたのは意外に遅く、1907年（明治40）、第一回文展に「白馬神苑」を出展して以降、丸山晚霞の作品には高山植物が顕著に描かれるようになった。いやむしろ、丸山晚霞の山岳風景画はこれ以降、高山植物なしにはありえなかつ

丸山晚霞記念館だより

たとも言える。

—白馬山は北アルプスの重鎮で、盛夏に千古の雪を蔵し、お花畑の神苑には万朶の花開き、千紫万紅妍を競っている。その上山頂には清泉が渾々として湧出している。

（「信州の写生地 2 夏季の写生地としての日本アルプス」 丸山晚霞、『中央美術』2巻8号、大正5年）

地元の湯の丸高原にも高山植物は無数にあるのだから、丸山晚霞の興味がもっと早く絵に表現されていてもよさそうなものであるが、白馬と湯の丸では決定的に違う風景があった。それは「雪」である。残雪をいただく初夏の高山に、色とりどりの花が可憐に咲き乱れる様が、丸山晚霞に大きな感動を与えたのである。

多くの山岳画家が、夏でも銀色に輝く北アルプスに魅せられ描いている。白銀に輝く高山は彼らにとって「神聖」なもの映るのである。

丸山晚霞の「白馬神苑」は、複数の作品があると思われるが、現在まで筆者が確認できたのはNo.4と、丸山家所蔵の軸装の2点のみである。このほか丸山晚霞は、八ヶ岳のお花畑も好んで描いている。

丸山晚霞の高山植物への憧れは、単に描くことに留まらず、植物研究の域に達していた。1911年、2回目のヨーロッパ旅行で

は、ロンドンのキュー植物園に植物学者・武田久吉を訪ねた際に、現地の研究者も舌を巻くほどの知識と興味を示したというし、山への写生旅行では同行する画家たちに、あたかも小学生の遠足のような雰囲気高山植物の名前やら植生などを教示していたという。

丸山晚霞は山岳画を描くときに「単に愛情や憧憬ばかりでは山を描くことはできない。土地の構造を極め、高山、低山、前山、山麓、高原、丘陵、低原と区別し、これらをまず赤裸にして山岳の骨格を極め、次にこれに植物という衣服を着ける。これはちょうど人体研究に裸体のデッサンをなすのと同じとみている」という考えをもっていた。

No5,6は丸山晚霞が祢津の健事神社に奉納した屏風である。本年、山の日制定記念展に際して、同定調査を行ったところ、およそ150種の高山植物が描かれていることが分かった。浅間連山、八ヶ岳連峰、北アルプス、欧州アルプスなどに自生する種が混在しており、また季節から考察してもこれらが一齐に咲くことは現実にはないが、花の色、形状はおろか、葉や茎の形状に至るまで現物を忠実に表現しているのである。これは前述の山岳研究の如く、植物に対しても単なる憧憬では描けず、植物研究が相当になされていなければ描くことのできないものであろう。

山岳画家丸山晚霞の功績

1905年(明治38)に創立された日本山岳会は、山岳調査のほか、日本に登山文化、山岳文化を広めることにも大きな役割を担っていた。丸山晚霞は1907年に会員となっている。当時は山を白黒写真でしか見ることのできなかつたうえ、情報も現在のようには入らない。この時代に、丸山晚霞はみずみずしい色彩で日本の山岳を紹介し、とりわけ信州の山岳の美を作品のみならず、登山技術や紀行文などを通じて広く紹介したのである。

1936年(昭和11)、山岳文化が日本で高まったことが機運となり、日本山岳画協会が結成され、丸山晚霞、吉田博は後進に懇願され創立に加わった。本年、同協会は80周年を迎えている。



4. 《白馬神苑》 1907年 水彩 個人蔵



5. 《溪谷と山巔麗花》 1930年 西宮区蔵当館寄託



6. 《溪谷と山巔麗花》 1930年 西宮区蔵当館寄託

寺院に残る丸山晩霞作品

1 法善寺（東御市常田）

法善寺は、静岡県にあった法善寺の移転として明治26年に起工、同28年4月4日移転再興、新たに身延山久遠寺直末に編入し、29年11月25日身延山77世物部日嚴上人を屈請開山と仰ぎ、開堂供養の典を挙げる。以来、日文中人を当地移転再興の当山開基とするとホームページにある。

ここには丸山晩霞制作の《釈迦八相図》《信察孝養の図》《佐渡塚原三昧堂の図》が残されている。《釈迦八相図》は、丸山晩霞のほか弟子の関晴風、油井小溪と約1ヶ月にわたり法善寺に泊まり込んで制作したもので、釈迦の懐妊から入滅までが全8図で描かれ、本堂の欄間絵となっている。なお、小諸玄光院には関東大震災被災者慰霊のために描かれた《釈迦八相図》がある。



7. 《釈迦八相図》全8図のうち「降誕」 1917年 法善寺蔵



8. 《信察孝養の図》 法善寺蔵

2 功山寺（山口県下関市）



9. 《石楠花図》 功山寺仏殿天井絵

功山寺は、山口県下関市長府にある曹洞宗の寺。長府毛利家の菩提寺。中国三十三観音霊場第十九番札所、山陽花の寺二十四寺第九番。1865年高杉晋作が挙兵した寺としても有名。仏殿は、善福院釈迦堂とともに鎌倉時代の禅宗様建築を代表するもので、国宝に指定されており、この天井絵は丸山晩霞の作品である。

これを描く経緯は、下関出身の評論家・横山健堂（黒頭巾）と丸山晩霞が懇意であったことによる。寺院には蓮が一般的であるが、釈尊が修業したヒマラヤに咲く石楠花を描いたことに、地元の依頼者一同が大恐悦し、丸山晩霞を招いて高級料亭で宴会を催

した。下関から選りすぐりの美女十数名が盛り上げる中、床柱にもたれ鼻くそをほじって仏頂面をした丸山晩霞がいた。酒が飲めないのも、早く飯にしろとの言い分だったらしいが、信州の野人丸出しの不行儀は、長州人を嘔然とさせ、さすがの横山健堂もハラハラしたという逸話が残っている。

現在、本作品は一部に剥離が見られるなど、経年劣化により傷みが進行している。仏殿の装飾であるため、国宝指定から外れているが、できるだけ早い修復を期待したい。

丸山晩霞のアトリエ羽衣荘

羽衣荘は東御市祢津、ちょうど東部湯の丸上りサービスエリアの上に建つ、丸山晩霞のアトリエである。敷地内には旧羽衣荘があったが、現存するのは昭和11年に新築されたものである。

羽衣荘の名前の由来は、丸山晩霞が庭に植えた「羽衣榎」の樹にちなんだもので、柏の変種である。葉の形が天女の持つ羽衣に似ていることからこの名がついたといわれるが、当時は数少ない珍種で、長野県の天然記念物の指定を受けた。島崎藤村の「羽衣榎の碑」も庭園内に建っている。

植物研究に熱心であった丸山晩霞は先に述べたが、この羽衣荘には世界各地から持ち帰った石楠花が多数植えられていたという。また晩年、ジュウシマツを愛した丸山晩霞であったが、小鳥の飼育はうまく行かなかったようで、小鳥供養の碑も建っている。

現在まで、当館では丸山晩霞記念館協力会、祢津有志と草刈り程度の手入れを行ってきたが、本年から「NPO法人ひと・生きもの・暮らし研究所」（代表・宮秋智子氏）の皆さんが、羽衣荘を貴重な郷土資料と位置づけ、長野県元気づくり支援金の認定を受けて庭園の整備を行っており、今後3カ年の計画では、羽衣荘を地域の交流拠点にしようという目標で活動している。



10. 「羽衣榎」（最右の樹）と「羽衣榎碑」（中央）



11. 当時をイメージして石楠花をはじめ、数々の植栽が行われた。